



もふもふと異世界で スローライフを目指します! 5

ALPHAPOLIS

カナデ
Kanade

目次

第二章	スローライフ編	137
第一章	終わりと始まり	7

CHARACTERS
登場人物
Mafumatu to Isakal de
Slowlife wo Mezashi masu!
Presented by KANADE

レラル

妖精族ケツシーと
魔獣チェンダの
血を引く子。



オースト

『死の森』で隠居している
ハイ・エルフ。
アリトを助けた恩人。

スノーティア

アリトの従魔となったフェンリル。
もふもふの毛並みは最高。



リナリティアーナ



ガリード



ミリアナ



ノウロ

パーティ「深緑の剣」

アディーロ

アリトの従魔となった美しい鳥。
風を操るのが得意。

リアン

アリトと従魔契約を
結んだ魔獣。
イリンの夫。

イリン

ティンファの耳を
気に入り、従魔契約を
結んだ魔獣。

タクー

白竜リユーラから託された子。
何に対しても興味津々。

アリト

日本から異世界アーレンティアに
落ちた『落ち人』で、本作の主人公。
『落ち人』について調べるため
旅に出る。

ティンファ

精霊族の血を引く少女。
しっかり者だが抜けている
ところもある。

第一章 終わりと始まり

第一話 世界

俺、日比野有仁ひびのありひとは会社帰りの道で突然地面の中へ落ち、日本から世界を越えてこの異世界、アーレンティアへとやって来た。『落ち人』として。

二十八歳だった俺は、十三歳くらいの姿になっていて、髪や目の色までもが変化していた。『落ち人』のこと、自分以外にこの世界へと落ちてきた人の足跡そくせきを求めて、保護してくれるオースト爺じいさんのもとを旅立ち、旅をする中で様々な出会いを経験した。

そしてずっと一緒に暮くらしていきたいと思える少女ティンファと俺の従魔じゆまたちと一緒に手掛かりを追って、とうとう俺以外の日本人、倉持匠くらもちたくみさんの家に辿たどり着く。

そこで白竜のリユースラと出会い、大陸の北の果ての海で、この世界の真理の一端いったんを知ったのだった。

「海が世界の端^{はし}ってことは、そこがこの世界の終わりってことか？」
 アデーラこと従魔のアデーラの背の上で、俺はぼつりと呟^{つぶや}いた。
 空から見た地平線や水平線の形状から、この世界は惑星^{わくせい}ではないらしいと予想していたが、こうして目の前に世界の果てがあると思うと、とても感慨^{かんがい}深い。

地図を頭の中で思い描^{えが}くと、中央南寄りに『死の森』、東に霊山^{れいざん}、北と西が辺境^{へんきょう}地、そして南は海を渡った先にもう一つの大陸がある。

俺の予想通り、この世界が平面であるとしたら。

リユーラが、『死の森』は特別で本当の意味での魔境^{まきょう}だと言った、その意味は。

「魔素^{まそ}は世界の端から中央に向かって薄くなっている、のか？」

南の大陸がどれほど離れているかはわからないけど、この大陸よりも南の大陸は小さく、実際に行き来している人がいて交流もあるという。

ロックバードやワイバーン並みの力がなければ、魔獣^{まじゅう}を撃退^{げたい}しながら空を長距離^{まきり}飛行し続けるのは無理そうだが、それらを従魔にできる人はごく少数だ。

だとすると、南の大陸には他の従魔でも渡れる可能性が高く、距離はそこまで遠くないのだと思う。

大陸の端となる場所の大半が、魔力^{まうり}濃度^{のうど}が高すぎる辺境地となっているのは、世界の端である海に近いからだと推測^{すいそく}できる。

それを踏^ふまえて頭の中の地図で世界の端を結^{むす}んでいくと――

「『死の森』は、ほぼ世界の中心、になるのか？」

『死の森』はこの大陸の中央部にあるが、正確には中央のやや南寄りから南部へ向けて広がっている。だから火竜がいる山脈などは、位置的には大陸のかなり南だ。

ああ、でもそう考えると霊山はどのような位置付けになるのかな。大陸の端の辺境地の中でも、東の霊山は恐らく特別な地^ちだ。

そうなると霊山と『死の森』の二箇所^{にかじこ}が、この世界で特殊^{とくしゆ}な場所ということになる。

「……なあ、ティンファ。ここは、森の中よりも息苦しいと感じていたりするか？」

今思えば、以前、ハイ・エルフのキーリエフさんと一緒に空から霊山を見に行った時に^{あつげかん}圧迫^{あつぱく}感を覚えたのは、霊山から漂^{たなび}う峻巖^{しんげん}さ^{さん}だけでなく、空気中の魔素濃度が高かったからではないか。

「そうですね。確かに、呼吸がしづらいような気はします。アデーラさんが崖^{がけ}沿^まいに降下してきた時から、そう感じていました」

やはり、今までの仮説はほぼ合っている気がするな。

「アデーラ、ありがとう。リユーラも。これから海を北に向かって飛んでくれるんだよな？」

俺が聞くと、リユーラは念話^{ねんわ}で返す。

『ああ、そうだ。では、そろそろ行くか。無理はせず、ダメな時はすぐに引き返すことにしよう。私も陸地に戻るまでは一緒に飛ぶからな』

『俺より、お前たちの方が先に限界になる。アリト、きちんとティンファアやレラルたちのことを注意しているのだぞ』

アディーに言われ、俺は皆に向き直る。

ティンファアと、妖精族ケットシーと魔獣チェンダの血を引くレラル、リスに似た姿の魔獣リアンとイリン、フェンリルのスノーことスノーティア、そしてリユーラの子供タクーが一斉にこちらを見た。

『ティンファ。これから北へ向かって海の上を飛ぶから、呼吸がもつとつらくなると思う。我慢できないようだったら、無理せずすぐに言ってくれ。レラルも、リアンとイリンもな。スノーは大丈夫だろうから、皆の様子を見てやってくれ。タクーのことも頼むな』

この先は、魔力濃度が高すぎて倒れる危険性がある場所だ。俺も気をつけなと。

『わかったの！ 私はおねえちゃんだから、ちゃんと皆のことを見ているの！』

えへんと胸を張ったスノーの頭を撫で、スノーの足の間にいるリアンとイリン、タクーもそつと撫でる。

『わかりました。今はそれほどつらくありませんが、無理をすると迷惑をかけてしまいそうですね。早めに言いますね』

『では、行くぞ』

アディーはそう言うと同時に方向転換すると、ギユンツと一気に加速して、遮るものがない水平線を目指して飛んだ。

キラキラと陽の光を映して輝く海面に、皆からわあつと歓声^{かたせう}が上がる。

『速度を上げ過ぎると、アリトたちに負担^{ふたん}がかかっても気づくのが遅れるから、もう少しゆっくりとな。お、海中にガープがいるな。高度を上げるぞ』

白銀に光るリユーラが斜め前に躍り出ると、輝く海面とリユーラの美しさに目を奪われる。そうしている間に、ぐんつと上昇して視界がさらに高くなった。

高度を上げないといけない魔物か！ と慌てて身構えた直後、大きな水音がした。

そちらに目を向けると、海面に飛び込んだ巨大な魚のような影があった。

『うわあつ！ 大きなお魚だよ！』

上から見ても、今俺たちを乗せて飛んでいるアディーより明らかに大きい。

……お魚、なんていう可愛いサイズじゃなかったぞ。あれが海の魔物か魔獣か……。

『あつ！ あそこにもいるよ！』

レラルが顔を向けている方に視線を移すと、まさに海面から飛び出した姿があった。

鋭く尖った角のような物が頭部から突き出し、背にはヒレではなく突起物が何本もそびえ立っている。開いた口からは、ギザギザの歯が覗いていた。どう見ても、魚というより

怪獣だ。

『あれはアグラードな。今落ちたら、お前なんてひと呑みだぞ』
うっ、怖いこと言わないでくれ、アデイー。その様子がありありと思ひ浮かんでしまっ
たじゃないか……。

「あれは……魚、ですか？　なら食べられるのでしょうか。凄いです」

『肉に毒はないはずだから食べられないことはないだろうが、俺でも食べたことはないぞ。
そもそも、陸地に棲む魔物は、わざわざ海に棲む大型の魔物なぞ狙わんからな』

「食べられるだろうけど、アデイーでも食べたことはないつてさ」

アデイーからの念話をティンファに伝えると、傍にいたレラルが魚の影をちらりと見た。
「レラル、あとでまたどこかの湖に寄って魚を獲るから、我慢してな」

大量に作った干し魚は、この間の宴で食べ切ってしまった。魚が好物のレラルのため
も、帰りに大きな湖を見つけたら、アデイーに頼んで寄ってもらおう。

「う、うん。大きな口だったよ。歯も凄かった……」

あ、食べたいわけではなくて、あの歯を見て怯えちゃったのか。

「なあ、アデイー。空を飛べる魔物は、海には来ないのか？」

『来ないな。考えてもみろ。あの崖をわざわざ降りてきて、獲れるかもわからない海の魔
物を狙うのは労力に見合わんだろう？』

まあ、そうか。海に潜れるなら別だが、この世界にはそういう進化をした種はいなそう
だしな。

アデイーだったら空からでもアグラード相手に勝てるだろうけど、その辺の魔獣や魔物で
は逆に食べられるだけだ。なら、わざわざ海で狩りをする必要はない。陸地には苦戦せず
に狩れる獲物がたくさんいるのだから。

「じゃあ、海の魔物たちはお互いが獲物なんだな」

まんま弱肉強食な海の中を想像して、げんなりしてしまった。

「あつ！　アリオさん、海の中に、とつても大きな影がありますよ！」

ティンファの指さす方を眺めてみると、海中をたゆたう、とても長い影があった。

……これだけの高さから見てもあの大きさつてことは、リユーラほどではなくても、かな
り大きいんじゃないか？

ざっくり見て、体長二十メートル以上はありそうだ。

世界最大のクジラの体長つて、どのくらいだったかな。シロナガスクジラだったっけ？
重量は軽く百トン以上だったか。あのサイズがごろごろいるなんて、絶対海の中には入れ
ないな。

この世界での海水浴は、それこそ命がけの行事になりそうだ。

先を行くりユーラと海中の影を見比べていると、それに気づいたリユーラが言う。

『あれは竜ではなく、ただの魚だな。海に棲む竜の最下級はシーサーペントだ。ワイバーンと同じ階位で……お、あれだ。ほれ、あそこにいる』

「えっ！ シーサーペントだって！ どこに……」

慌ててアディーの背から身を乗り出すと、ティンファヤスノーも一緒になって下を見た。「うわあ。あれですか？ とても大きいです。でも、リユウラさんの方が大きいですねー」海面が上がってきた長い影を見ると、シーサーペントはリユウラの気配を察知したのか、水音を立てて顔を出した。

大きな顎に鋭い牙、そして頭上には二本の尖った角。うすい水色に輝く鱗を持った巨大な姿に、俺は息を呑んだ。

「ガアアアアアッ！！」

大きなヒレで海面を叩いて上体を海上へと持ち上げたシーサーペントは、大きく口を開け、俺たちへ威嚇の声を放つ。

『グワアアアアアアアッ！！ こわっばが、粹がるなっ！！』

それに対して、リユウラが今まで一度も聞いたこともない声音で海面へ向けて吠えた。それに伴って周囲の風が渦巻き、一気に雲が厚くなって雷鳴を響かせる。

「ヒッ」

その威容に、自分に向けられた敵意でなくても無意識に体が強張り、引きつった声が出た。

体の震えと同調するかのごとく、灰色の分厚い雲からはゴロゴロと雷鳴が響き渡る。

顔が真っ青になり、体が小刻みに震えている隣のティンファヤを、萎縮する手を動かしてなんとか引き寄せた。

『リユウラ、かっこいいの！ スノーも吠えてもいい？』

『いやいやいや。スノーはダメだ。今のリユウラのは、階級を思い知らせるための威嚇だからな。お願いだから、スノーはここで大人しくしてくれ』

無邪気なスノーの言葉で、一気にガクッと力が抜けてため息が出た。それと同時に体の感覚が戻り、震えが止まる。

「ふう。ティンファ、大丈夫だ。ほら、リユウラのはただの威嚇だよ。本気じゃないから、雷も落ちてないだろう？」

黒雲が立ち込め、ゴロゴロと鳴りながら稲光は走っている、それ以上は変化しない空を示す。

『おお、すまん。海の若造は礼儀を知らなくて困る。外の世界を知らないからな。フン。粹がつて吠えたくせに、尻尾を巻いて逃げおったわ。かかってくるなら、風で海を割ってやったものを……さて、ではさっさと行くとするか。そなたたちには、そろそろつらくなってくる頃合いだろうか？』

リユウラに言われて下を見ると、いつの間にかシーサーペントの姿は海面から消えてい

た。それどころか他の魔物も海の奥深くへ潜ったようで、海面は静まり返っている。

まあ、リユーラに威嚇されれば、さっさと逃げ帰るのは当然か。

でも、俺たちにはつらくなるって……？

そこで周囲を見回し、今さらながら、肩を抱いたティンファの顔色が元に戻っていないことに気づく。

「ティンファ？ どうしたんだ、大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫、です。もう震えは治まったはずなのに、なぜだか今度は息をするのも苦しくなってきたって……」

「息をするのも？ ……あつ！ そうか、魔素の濃度の影響かっ！」

シーサーペントが出てくるくらい、陸から遠く離れている。

これがリユーラの言っていた頃合いつてことか！

「やっと気がついたか。お前は鈍いにもほどがあるぞ」

アディーに言われて意識してみると、周囲の空気が濃くなったような感じで、呼吸しづらい気がする。これが大気中の魔素の濃度が上がった影響なのだろう。

「俺はきちんと見ておけと言っただろうが。スノーは平気だが、レラルたちはそろそろつらいと思うぞ」

「えっ！ レラル、リアン、それにイリン、大丈夫か？」

慌てて振り返ると、スノーの足の間でレラルとリアンとイリンが丸まって震えていた。

「……なんか、息が吸いづらくて、だんだんだるくなってきた、よ。頭がぐるぐるする」

「ひう……魔素が、多くて、動けな……い」

「うわっ!? リユーラ、アディーー！ レラルたちが限界だ、今すぐ、急いで戻ってくれっ!!」

さすがに白竜の子のタクーは、首を傾げて不思議そうに蹲る三人を見ていただけだったが。「慌てるな。まだ大丈夫だ。スノー、その三人の周囲に魔素を遮る障壁を張れ。障壁に魔素を吸収させるイメージだ。戻るのはまだ早い。もう少しだけ先へ行く」

「わかったの！ 私、おねえちゃんだから、できるのー」

スノーが足の間の三人を守るように、周囲に新たな障壁を張った。今までの風と圧力除けの障壁の内側に張られたそれは、みるみる周囲の魔素を吸収して分厚くなっていく。

触れてみると、大気が通過する時、魔素を通さずに障壁に蓄積させているようだ。

しばらくしたら、震えてぐったりとしていたレラルたちが、ほっとしたように大きく息をついた。

「良かった。さあ、ティンファ。ティンファもスノーの隣に来て、三人と一緒にいた方がいい。スノー、ティンファも入れてくれないか」

「わかったの！ もうちよっと大きくするの」

荒く呼吸をするティンファを支えて立ち上がり、俺と位置を交換してスノーと俺の間にティンファを横たわせ、カバンから毛布を取り出して掛けた。するとスノーの障壁が拡大され、ティンファを包み込む。

様子を窺っていると、ティンファの青白くなっていた顔に少し赤みが戻り、安堵の息をつく。

これが、魔素の濃度が上がるということか。

世界の真理に近づくということがどういうことか、やっとわかってきた気がした。

『スノーはそのまま、ティンファと皆のことを頼むな』

『わかったの。私の毛皮で包んであげるのー！』

そっとスノーがティンファの傍に横たわり、尻尾で包んだのを見届けると、俺は一人立ち上がり、音を立てないようにアディーの頭の方へ移動する。

『なあ、アディー。もういいんじゃないか？ ティンファたちが限界だ』

『フン。リユーラが戻ると言ってるからだ。……お前の体調はどうなんだ？』

もう一度意識してみると、さっきよりもさらに吸い込む空気が重く感じられた。

ゆっくりと細く息を吸って吐き出す。すると呼吸とともに吸い込まれた魔素が、体の中で暴れ回っているかのように落ち着かない。

これほど魔素が濃いと、呼吸からもそれを取り込んでいることを実感するな。

この世界の人は、呼吸と食事で空気中や食物に含まれる魔素を体内に取り込み、自分の魔力に変換している。その変換する効率や体内に留める量の差が、人が持つ魔力量の差なのだ。

ただあまりにも濃い魔素は、体内に入れるだけで負担になるのだと初めて実感した。

『体内で魔素が暴れているよ。息が苦しくなってきたかな』

呼吸をしているのに、空気を吸い込めている気がしないのだ。二酸化炭素中毒ってこんな状態なのだろうか、場違いにも考えてしまった。

『なら、きちんと見ろ。お前が見たいと言った、世界の真理の一端を』

そう促され、前を見やすいようにさらにアディーの頭部を進んで身を乗り出す。

そして見た。

真つすぐな水平線を描く、青と蒼が混ざり合う海と果てのない空を。

海に波はなく、ただ静かに海水が流れ、そして空は、先ほどリユーラが呼び寄せた暗雲は散り、雲の間から覗く太陽の光が海面を照らして輝いている。

あらゆる生命はここから生まれた、原初を司る全ての始まりの景色。

地球と同じように、アーレンティアも、この果てから始まったのだとストンと腑に落ちた。

ここから生命が生まれ、そして生を育み死ぬと世界に還る。それが自然の理で真理なのだ。

今、呼吸がままならないほどの魔素が満ちている、視界には何も変わらずただ空と海

が広がっていた。

『魔素が濃くても、見た目は変わらないんだな』

『……もっと先へ行けば、目に見えるほどに魔素が濃くなる。そうになると、全ては白く塗り潰されていくのだ』

リユースラの言葉には、憧憬の響きがあった。

リユースラでも、辿り着くことのない世界の果て、か……。

『では、まだここは序の口ってことですね。……世界は広いな』

魔素が密集し、見渡す限り白く染まっている世界の果て。

ここでは全てが魔素に変換され、何者も存在することができない場所なのだろう。

俺はアーレンティアで生まれたわけではなく、魔素が存在するこの世界の未知を解き明かさないと、自分の存在が安定しないという強迫観念があったのかもしれない。だから俺と同じ立場の『落ち人』の手掛かりを求め、少しでも自分を納得させようと世界の真理にまで手を伸ばした。

でも、世界の真理なんて、当然俺の手には余ることなのだ。それを求めるのにも、覚悟と決意と探究心、そして懸命な努力が必要になる。

俺にはそのどれも無い。赤子が駄々をこねて親の力で全てを手に入れようとするように、スノーやアディーの力で手が届くのだと錯覚していただけだった。

そのことを、リユースラとアディーは体感として理解させてくれたのだ。

『なあ、アディー。アディーはもって果ての近くまで行けるのか？』

『いや。俺は霊山の頂を見ることを望んだが、果たせたことはない』

『ふふふ。我でも辿り着けんよ。全てが白く染まる果てで、世界と同化することをいつかは我也望む時が来るだろうが、今ではない。さあ、戻ろうか。いいか、アイトよ。この景色を、覚えておくのだ』

魔素の塊である竜は、果てにある魔素に意思が宿って生まれた存在なのだろうか。

ああ。地球が丸くても、この世界が平面でも、日常の生活には何の関係もない。

地球が惑星だと自分の目で見て確認したわけではなく、ただ知識としてあるだけだった。その地球でも、宇宙の果てを夢見て宇宙船を作って飛び立っても、終わりの見えない銀河が広がっていたのだ。俺は宇宙に出たいと夢見たことなどなく、ただ毎日、それなりに暮らしていただけだった。

俺の望みは、大切な家族と一緒にのんびり暮らしていくこと。一旗揚げようなんて気もなく、田舎で自分の好きなことをして過ごしたい。

そんな俺には、世界の真理を知る必要などない。もう大切に想う家族ができたのだから——それでいいんですよね、倉持匠さん。俺は、この世界がどうであれ、ここで生きていきます。

アーレンティアで生まれたわけでもないし、こちらの世界へ渡ることを望んだわけでもない。でも、今、そしてこれからはこの世界の一員として生きていくのだ。

じつと地平線を見つめ、ゆっくりと立ち上がって周囲を見回す。すぐ近くには白銀に輝くりユウラが、そしてアディーとその背には大切な家族たちがいる。それ以外は、全て空と海に囲まれて。

『この景色を覚えておきます。絶対に忘れない。そして、俺は俺として生きていきます』
『ふふふ。それでよい。主とそなたは違う。目指すところが異なって当たり前なのだ。さあ、戻ろう。そなたの仲間たちがつらいだろう』

『はい。ありがとうございます、リユウラ。……また、倉持匠さんの書いた本、読みに来ます』

『ああ、待っている。いつでも来てくれ。アディー、来た道に戻るのではなく、東寄りに陸地へ戻ろう』

『わかった。では、戻るぞ』

忘れない。陽を浴びて白銀に輝くりユウラの美しさも。

アディーの背を歩き、スノーの隣へ戻って座ると、ぐっと圧がかかって反転したことがわかった。

そつと寄り添^そうスノーの背を撫で、ゆっくりと呼吸をしながら遠くに見える緑を見る。

俺はアーレンティアに落ちてきた時、この世界に適合するように姿が変わった。生まれ変わって魔力を得たのだ。だったら、この世界の理の中で暮らせはいい。

そのことを納得するために、皆の親切に甘えてこんな遠くまで来てしまった。

ああ、でもやっぱり波が寄せてこない海は不思議だよな。太陽だって二つもあるし。惑星でないのなら、太陽の道筋^{みちすじ}が変わるのはなぜなのだろう。

そういえば、海に来たけど海水がしょっぱいかどうかもわからなかった。気にはなるが、あんな魔物や魔獣が棲む海へわざわざ近づいて海水の味を確かめるのもな……。

この世界を知るたびに、地球との相違点^{さういってん}が次々と浮かぶ。

俺の中の常識は、今でも地球のままだ。でもそれは仕方がない。地球の日本は、俺の故郷なのだから。

この旅に出て、倉持匠さんが遺^{のこ}してくれたものに辿り着くことができて、ゆっくりでも俺の身体^{からだ}は成長していくことがわかった。いつかは俺もここで年老^{としが}いて死ぬ。それがわかっただけでも十分な成果だ。

この旅で仲間も増えて、皆が家族になった。あとは、自分の思うまま生きていこう。

オースト爺さんにはオースト爺さんの目標があるように、俺はゆっくり楽しんで生きていきたい。

『……なあ、アディー。この後はエリダナの街へ寄ろう。ティンファのおばあさんが心配

しているだろうから。俺もキーリエフさんに、集落でマジックバッグを渡したこととか話さないとな」

『ああ、わかった。リユーラと別れたら、そのままエリダナの街へ向かう。……俺は元々そのつもりだったがな』

おお！ アディーがデレた！ ふふふ。

『そうか。アディーは優しいな。ありがとう。いつも感謝しているよ』

『フン！』

エリダナの街へ行つて……そうだ、その後はミランの森に住むリアーナさんにも会いに行こう。

冒険者パーティ『深緑の剣』の一員であるリナさんにはエリダナの街で会えたらいいけど、どうだろうな。手紙が来ているか確認してみないと。

ああ、同じパーティのガリードさんたちにも会いたいな。なんだか凄く懐かしいや。でも、その前に。

『なあ、アディー。エリダナの街に戻ったら、俺と二人で霊山へ行つてくれないか？ 遠くからでもいい。もう一度、あの姿を見たいんだ』

キーリエフさんに連れていってもらった時は、その峻厳な姿を見て、ただ漠然と畏敬の念を抱いただけだった。

でも、今では。

『死の森』は世界の中心の地。霊山も、この世界にとって恐らく特殊な地だ。

『……いいだろう。付き合つてやる。なんなら霊山から海へ飛んでやつてもいいぞ』

『いや、もう海はいいよ。……俺には真理を探究するなんて無理だ。ここまで連れてきてもらつて、身の程を思い知つたさ。でも、こうして実感することができて良かったよ。本当にありがとう、アディー』

霊山を越えた東の海にも、もしかしたら特殊な意味があるのかもしれない。けれど、俺はもう真理を追うことはしない。

世界の真理に触れて、その深さをしみじみと実感できたから、今の心境で霊山の姿を見たいのだ。

『見えるか。右手のずっと彼方にあるのが霊山だ』

リユーラが示した先を、思わず身を乗り出して目を凝らすと、ずっと広がる緑の森の奥、遥か彼方に雲の上へと続く霊山の姿が微かに見えた。

『ああ……。俺たち、本当に遠くまで来たもんだな』

キーリエフさんの屋敷を出たのが、もうかなり前のことのように感じる。

『いい経験になったのではないか。さあ、ティンファたちの様子を見てやれ。もうここまで来れば魔素は大丈夫だろう』

そう、いい旅だった。一步一步、ここまで自分なりに進んできたのだ。気づけば、先ほど見た海岸となる崖が迫^{せま}ってきていた。陸地はもうすぐだ。

『どうだ、スノー。アディーがもう魔素は大丈夫だろうって言っているけど、障壁を消しても皆は平気かな』

『うん、もう平気だと思ふの。じゃあ、消すね!』

スノーが障壁を消したのを感じると、立ち上がって反対側のティンファへと歩み寄る。そっと肩に手をかけて挿^さすり、呼びかけると。

『ティンファ、大丈夫か? 陸地へ戻ってきたよ』

『ア、アリト、さん。う……すみません、まだ、気持ち悪い、みたいですよ』

『無理しないでそのまま寝ているといいよ。レラルも……ああ、寝ているな』

少しだけ顔を上げたティンファの顔色が、少し良くなったのを見てほっとする。

レラルはいつの間にか、スノーの足の間で丸まったまま寝息を立てていた。その呼吸音も安定していて、苦しそうではない。

『リアン、大丈夫か?』

『ん……だ、大丈夫。凄く、きつかったけど、もう、平気、だ。嫁^{よめ}も意識戻った』

『それは良かった。しばらく休んでいてくれ』

横たわる皆を不思議そうに見ているタクーを抱き上げ、そっと頭を撫でる。

「タクー、皆は魔素が多すぎる場所だと生きていけないんだ。タクーはまだ小さいけれど、大きくなったら皆を守ってくれな」

『う? まもる? ……うん。みんな、まもる!』

小首を傾げながらゆっくりと言われたことを考えていたタクーが、こっくりと頷^{うなず}いた。その頭をよしよしと撫で回す。

白竜は偉^{たい}大な存在だが、こうして他の生き物と同じく成長を重ねていくのだ。

「俺は弱いからな。スノーやアディーはとても強いけど、タクーはもつと強くなる。お前は生んでくれたリユーラの望み通り、色んなことを経験してくれな」

様々なものを見て、タクーはタクーなりの白竜になるのだろう。

『ん?』

タクーは今度は言葉の意味を理解できなかったのか、きよんとする。

そんなタクーを、優しく抱きしめた。

大きくなった姿を俺は見ることがないだろうけど、どうか健^{すこ}やかに真っすぐに育って欲しい。

『ふふふ。ティンファと小さき者たちにはきつかったようだから、このまま陸地を飛ぶといいだろう。我はここで見送ることにする。ではな、アリト。タクーをよろしく頼むぞ』

アディーより少し斜め上を飛んでいたリユーラが、陸地へと戻ったところでアディーの隣に並んだ。

「リユーラ、色々とありがとうございました。タクーも、しっかりと見守ると約束します。また会いに来ますね」

今はもう、恐怖をあまり感じなくなった大きな顔を見つめ、頷く。

『ああ、また、来い。待っているぞ』

『……タクーには次に会う時まで、きつちりと風の使い方を仕込んでおくから心配するな』
『ふふふ。よろしくな、我らとは別の風の王よ。次に会う時を楽しみにしていよう。ではな』

そう言うリユーラは、アデイーの周囲をぐるっと飛んでから斜め後ろへと下がっていった。

「またな、リユーラ！ タクーは預かります！」

片手でタクーを抱き、もう片方の手を後ろへ遠ざかるリユーラへと大きく振った。

アデイーはそのまま振り向くことなく、遙か彼方に微かに見える霊山の方へと真つすぐ飛んでいく。

リユーラがまだ近くににいるからか、アデイーのスピードが速すぎるからか、周囲には空を飛ぶ魔物や魔獣の姿はなく、ただ青い空が広がっていた。

『そうだ、アデイー。アルブレド帝国はどっちの方向かな』

『右前方だ。遠くを見れば、森が薄くなっている場所があるだろ』

言われた方向をよく見てみると、遙か彼方に緑が途切れている場所があった。

最北端に位置する人族の国。人から聞いた話と人族主義という国家方針のイメージから、足を踏み入りたいとは思わないし、今後も恐らく訪れることはないだろう。

それでもこの辺境に囲まれた地で、人だけで生き抜いているのだ。

力の強い獣人に森との境目の警備を頼めばいいだろうにな。共存した方が、人族だけで暮らしていくよりも、数段楽になりそうなのに。

人族の方は獣人に比べれば弱く、魔力も高くない。突出した身体能力はなくても、人族にだって人族にしかない取り柄はあるのだから、互いに補完して生きればいいと思う。

こういう考え方は、別に俺が違う世界に生まれたからとかは関係ないよな。同じ世界に生きていたって、思想は人それぞれだから。

でもそんな人族主義のアルブレド帝国も、空から見ればエリンフォード国と同じように森の緑と草原の緑が広がっているだけだ。

「ん……ああ、もうリユーラさんと、別れたんですね。挨拶をできませんでした」

「仕方ないさ。ティンファ、顔色は良くなってきたけど、気分の方はどう？ まだつらいなら横になってなよ」

ティンファがまだ少し顔色が悪いながらも起き上がったのは、リユーラの姿が完全に見えなくなった頃だった。レラルは今も寝たままだ。リアンとイリンも、いつしか寝息を立

てている。

「大丈夫です。少し気分が良くなりました。魔素の濃度でここまで体調が崩れるとは思いませんでした。アリートさんは平気だったのですか？」

「いいや、呼吸するのもかなり苦しかったよ。まあ、俺は落ちてきてから何年も『死の森』で暮らしていたからか、魔素の濃度に鈍いところがあるみたいだな」

旅に出た当初は、なんか体が軽し動きやすいな、と思っただけだった。

でも、こうして辺境地まで旅をしてきたことで、いかに『死の森』の空気が魔素を含んでいたのかを実感した。

今思えば、爺さんの家で暮らし始めた頃に動くのも怠いと感じたのは、濃密な魔素を急激に体に取り入れたせいだったのだろうな。もちろん、この体に慣れていなかったというのもあっただろうが。

「そんなアリートさんでもつらいと感じたのなら、私が無理だったのは仕方なかったのでしょうかね。……ふう。風が気持ち良くて、大分楽になりました」

ティンファの顔色を見てみると、確かに寝ていた時よりも赤みが戻っている。これなら、もう少し休めば大丈夫だろう。

「それは良かった。もうそろそろ昼なんだけど、ご飯はどうしようか……。ちよつとアディーに聞いてみるか」

早朝に出発したが、大陸の端まで行き、崖を降り、さらに海を北へ北へと向かって飛んだ。そして引き返してきたから、それなりに時間が経っている。

「アディー、エリダナの街にはどれくらいかかりそうなんだ？ 何回か野営を挟むのか？」

「フン。俺は別に休憩する必要などないから、飛ばせば夜には着く。キリーエフの屋敷の庭になら、夜でもそのまま入れるのではないか？」

うわ。アディーなら一日、二日で着くのだろう、とは思っていたけど、今からでも今日中には着くのか……。凄い。というか凄すぎないか、アディーは。

「そ、それは……先に連絡入れてないのに大丈夫かな？」

「大丈夫だろう。飛ばせば着くの、わざわざ野宿するのか？ ティンファたちを屋敷で休ませた方がいいのではないか？」

「あつ！ そ、そうだな。じゃあ頼むよ。昼食はこのまま背中食べさせてもらおうけどいいか？」

「絶対にこぼすなよ。汚したら……わかっているな？」

うっ……。汚すって言っても、浄化魔法を掛けたらすぐにキレイになるのに！ ま、まあ注意して食べようかな。

ハア……。確かにティンファには、安心できる場所でゆっくり寝て欲しい。

アディーは、さっきまではやっぱり速度を加減してくれていたんだな。

ちらっと下を覗くと、ずっと森が続いている。目印になるものがないからわかりづらいが、凄まじいスピードで飛んでいるのだろう。

「アリオトさん？」

「ああ、ごめん。今夜にはエリダナの街へ着くそうだから、食べられそうだったらこのままおにぎりを食べよう」

「ええっ！ 今日中に着くんですかっ！ す、凄すぎないですか、アディーさん。さすがですね」

「本当にな……。行きは二月はかかったのにな……」

「でも、この旅ではイリンと契約できましたし、色々なことが勉強になりましたから。私にとつてとても良い経験になりましたよ」

そうなんだよな。俺はリアンと契約して、たくさんの集落の人たちにも出会って。間違はなく、自分にとっていい旅だった。

「ただ、帰りがあつさりすぎて、こう……余韻がないっていうか」

「ふふふ。贅沢ですけど、確かにそれはありますね。でも、おばあさんにたくさんのことを報告するのが楽しみです！」

旅に出た時と、今の自分。少しは精神な顔になって、キリーエフさんと再会できるのだろうか。

第三話 エリダナの街への帰還

ほどなくしてティンファの体調も落ち着き、レラルが起きたので皆で昼食を食べた。

のんびりと空の旅を楽しんでいると、遠景にある微かな影に過ぎなかつた霊山の姿がだんだんと大きくなってきた。

「あつ！ あの遠くに見えるのが、私の住んでいた村のある山でしょうか？」

「うーん、位置的にそうかもしれないな。こうやって見ると、山が少ないよな」

恐らく数百キロは飛んできただろうに、視界に広がるのはずっと森、森、たまに草原、という感じだ。

陽ざしが陰るとともに、森は追いやられるように視界から少なくなり、代わりに増えてきた平原には街道が走って、薄い緑や低い山がぼつぼつと点在しだした。

あつという間に通り過ぎてしまいが、よく見ると街道の途中に村や小さな町もある。

そうして夕暮れが近づいてきた今、エリンフォード国の国境になっている山々が見えてきていた。長距離を移動してきて、やっと見えた山脈だ。

山が多い島国で、大学まで山の麓で育った俺には、森や平地ばかりというのはやはりと

でも不思議な光景だ。

「そうですね。私は山で育ったから、山がないのはなんだか不思議な感じです」

「あつ！ 今、俺もそう思っていたんだ。日本は山が多い国だったから。俺の育った田舎も、山ばかりだったんだよ」

「アリトさんも山で育ったのですね！ ……空から見ると、人が暮らせる場所と魔物や魔獣の棲む場所がくっきりと分けられているのが一目でわかりますね。『死の森』のような例外もありますが、大陸の内側は人の領域なのです」

そう言われて頭の中に、濃い緑と薄い緑で色分けされた大陸図が描かれた。

大陸の外縁部、海に接した土地は辺境地——つまり森だ。その内側に様々な国がある。例外は大陸中央部から南部へ広がる『死の森』と、火竜の棲む山脈だ。

今のような地図になったのも、オースト爺さんやキリーエフさんたちが今まで歴史を作ってきた結果なのだろうけどな。

「人族でもエルフでも他の種族でも、アディーのような魔獣や動物の力を借りなければ、移動するにはとても時間がかかる。それを思えば、人の領域はそれほど必要ないのかもしれない」

かといって内部が平原ばかりというわけではないし、小さめでも森や川や湖だつてある。だから人が移動する時には、いつだって魔物や魔獣への警戒は必要だ。

そんな状況では馬車で旅するのは命がけで、国をまたいで大陸を縦断するとなったら、何ヶ月もの旅になる。もしかしたら一年以上かかるかもしれない。

人は森より平原、村より街のさらに安全な場所に居住し、そこから移住することはほぼない。それでも人口が集中しすぎて溢れる、ということは、旅の間に見た街ではなかった。

そう考えると、人口と土地のバランスはとれているのだろうな。

「そうかもしれませんがね。でも、アディーさんにはこの世界は狭そうです。まさかエリダナの街まで一日もかからないとは思いませんでした」

「……お前たちが進んだのは森の中だからな。直線距離なら、エリダナの街からナブリア国の王都の方が遠いぞ」

「ああ、そうか。ティンファ。アディーが直線距離ならそう遠くないって。道があつて真つすぐ行けたなら、一月もかからなかつたかもな」

飛行機で東京から北海道まで、二時間くらいだっけ？ それを考えれば、アディーのスピードならありうるのか。

「なるほど。確かにずつと道もない森を歩いていましたから、一日で進む距離は街道を行くより大分少なかったです。それでもこれだけあつという間に戻ってこられるなんて、アディーさんは速すぎだと思えますけど」

振り返っても、辺境の地はもう見えない。左方斜め前を見ると、夕闇の中に佇む霊山の

雄大な姿がある。

「本当に帰りはあつという間だった。」

「アデイーおじさんは凄いや！ こんなに早く帰ってこられるなんて思ってたけど、お母さんへの手紙は書き終わってたから良かったよ」

目を覚ましてからはずっとティンファの膝の上にいるレラルが、ゴロゴロと喉を鳴らす。「お手紙を書いたのね。早くお返事が届くように、明日アデイーさんに頼みましょう」

「うん！」

エリダナの街に滞在していた時、レラルはリアーナさんを介して母親と手紙のやり取りをしていた。

俺たちが『死の森』に住むようになったら直接レラルと母親がやり取りできないか、リアーナさんに聞いてみようかな。

そういえば俺もオースト爺さんへは、妖精族の村で手紙を出したつきりで、無事に目的地に到着したことも伝えていなかった。旅が終わったらティンファを連れて戻ると書いたら、張り切って準備していると返事があつたから、今頃は新しい小屋でも建ててくれているかもしれないな。

「あ、そうだ、ティンファ。そろそろ話が届く距離だと思っうから、おばあさんに明日帰ると伝えておいたらどうか。今晩は何時に着くかわからないからキーリエフさんの屋敷に泊まって、明日からは二三日はおばあさんの家でゆっくりするといいよ」

まだエリダナの街の灯りは見えないが、霊山の大きさからするとそれほど遠くないだろう。そろそろギリギリ話が届くと思う。

「あ！ そうですね、連絡してみます！ でも、ゆっくりなんてしていいんですか？」

「うん。俺もその間にキーリエフさんに報告しないとけないし、手紙を確認するとか街でやることもあるからね。少なくなった食料の買い出しもしたいし。ゆっくり休んでから、ナブリア国のミランの森へ寄ろうと思うんだ。リアーナさんも、レラルの無事な顔を見せたら安心するだろうからね。あ、途中のティンファが住んでいた村へも寄っていく？」

アデイーもティンファのためなら寄ってくれるだろう。

「はい！ きたたら村長さんに声を掛けたいです」

「そうだね。家の面倒を頼まないで、だしね。じゃあ、ティンファはおばあさんへ話を繋いでみてくれ。俺もキーリエフさんに繋いでみるよ」

ティンファとおばあさんの念話の魔石を作った後、同じものを何かあった時の連絡用にキーリエフさんに渡しておいたのだ。だから今は、左耳にオースト爺さん、右耳にキーリエフさんと念話するための魔道具をつけている。

まあ、普段は全然使えないんだけどな。オースト爺さんへは、王都へ着く前にはもう距離的に連絡できなくなっていたし。そうだ、オースト爺さんへは手紙を書いておかないと。

右耳につけている魔石に意識を向け、目を閉じて集中しながら魔力を込めて繋がるように念じる。

「……聞こえますか、キリーエフさん。アリートです」

かすかに繋がったような感覚があり、その繋がりを慎重に維持しながら念話を送る。

「……ああ、アリート君か。聞こえるよ。もしかしてエリダナの街の近くにいるのかい？」

繋がった瞬間、細い繋がりが一気に太くなりしっかりと安定した。キリーエフさんの魔力が補強してくれたようだ。

「はい。アディーに乗せてもらって向かっています。今、正確にどの辺りを飛んでいるのかはわかりませんが、恐らくそれほどからずエリダナの街に着くと思います。それでアディーがキリーエフさんの屋敷へ直接降りると言っているのですが、大丈夫ですか？」

「おお、ついにアディーが乗せてくれたんだね！ ウイラルなら、それは速いだらう。では、私から兵士に通達して手配をしておくから、直接来てくれてかまわないよ」

キリーエフさんの声を聞いて、なんだかとても懐かしくなってしまった。旅に出る前に滞在した日々が思い起こされる。

ドワーフのドルムダさんは、まだキリーエフさんの屋敷に滞在しているのかな？

「ありがとうございます！ もっと近くなったらまた連絡しますので。あと、急で申し訳ないのですが、俺とティンファを今晚屋敷へ泊めていただいていいでしょうか？」

「もちろんだよ。エリダナの街に居る間は、また屋敷に滞在してくれ。アリート君ならいつでも歓迎するよ。土産話を楽しみにしているからね。では、待っているよ」

楽し気な様子に思わず頬が緩んだ俺は、続けてアディーへ念話する。

「キリーエフさんに念話で伝えたいよ。屋敷にそのまま降りていいそうだから、街が近くなったら教えてくれるか？」

北へ旅立った時には、帰りはどこを通るのか決めていなかったために、エリダナの街へ戻るとは言っていなかった。でも、歓迎してくれるとのことので一安心だ。

「わかった。あともう少しだ。予定通り、夜遅くなる前に着くだろう」

「ありがとう、アディー。エリダナの街に何日か滞在して、ティンファの疲れがとれてから出発しよう」

倉持匠さんの庵に滞在している間はそのんびりしていたけど、高濃度の魔素に当てられて心身が疲労しているはずだ。それに、おばあさんの家なら、ゆっくりとくつろいで旅の疲れを癒すことができるだろう。本当にティンファには無理をさせてしまったからな。

「アリートさん。なんとかおばあさんと繋がりました！ 明日の午後なら家にいるそうです！」

ティンファの方も、無事に連絡が取れたようだ。

「それは良かった。こつちもキリーエフさんと繋がって泊めてくれることになったから、今晚はゆっくり寝て、明日はお昼を食べてからおばあさんの家へ一緒に行こう。送ってい

くよ」

とてもうれしそうに無邪気な笑顔を浮かべたティンファの姿を見て、ほっと安心した。海上での、青白い血の気の引いた顔をしたティンファを思い出すと、今はゆっくりして欲しいと思う。

これから向かうのは『死の森』なのだ。俺にとつては、オースト爺さんが住んでいる思いの詰まった懐かしい地だが、ティンファにとっては北の辺境地と同じく過酷な環境だろう。

「ありがとうございます。ふふふ。でも、楽しみですね。アイトさんはおばあさんと会ってくれましたから、私もオーストさんにご挨拶できると思うとうれしいです」

「森にはおかあさんもおとうさんもいるの！ それに、たくさんのおじさんおばさんもいるよ！ 私も帰るのが楽しみなの！」

……本当になわなないな、ティンファには。なんでこんなに、いつも欲しい言葉をくれるのか。

祖父母の家で過ごしていた子供時代でも、家に友達を招くことなんてなかったのに、オースト爺さんに友達どころか恋人……そうだよな、恋人を紹介するだなんて！ そう思うと凄く気恥ずかしいな……。

「ティンファ、スノーがお母さんもお父さんもいるつてさ。スノーの両親には、俺もとて

もお世話になったんだ。他にもたくさんのもふもふたちがいるから、楽しみにしていな！」

「そこにチェンダもいるんだよね？ わたし、おとうさんには会ったことがないから、同じ種族のチェンダに会えるのが、少し怖いけど楽しみだよ！」

「あら、レラルちゃんも私と一緒に皆さんにご挨拶しましょうね。でも、とりあえずは先に、レラルちゃんを育ててくれたリアーナさんにお会いしないと」

「うん！ リアーナに会えるのも楽しみだよ！」

楽しそうにこれから先を語るティンファとレラルに、俺もうれしくなった。

やっぱり、皆と一緒にのんびり過ごせれば、それが俺にとつての幸せだよな。

「おい。もう少しで着くぞ。連絡を入れるなら入れておけ」

「あ！ アデー、ありがとうございます！ ティンファ、もう少しで着くみたいだ。俺は今からキーリエフさんに連絡するから」

先ほどと同じように右耳の魔石に手を触れ、そこに宿ったキーリエフさんの魔力を辿って念話を飛ばす。距離も近いし、二度目だからかすぐに繋がった。

「キーリエフさん。聞こえていますか？ もうすぐ着くそうです」

「おお、アイト君。こちらの準備は終わっているよ」

「ありがとうございます！ では、また」

さすがキリーエフさんだ。もう街の兵士への連絡は済んだみたいだな。

……街の門から入ると、また強引に門番に屋敷に連れていかれそうだから、直接屋敷に降りることになったのは良かったのかもしれない。到達地が同じでも、無理やり連行されるのは勘弁して欲しいからな……。

『アディー、いつでも大丈夫だそうだよ』

『では、お前たちも降りる準備をしておけ。もう着くぞ』

えー！ もうすぐって、本当にすぐだな！

『ティンファア！ アディーがもう着くから準備してくれって！ すぐ近くまで来ていたみたいだ』

『わかりました！』

慌てて移動して背中の中にも皆で座り、タクシーを抱っこして着地に備える。するとすぐに下降が始まった。

『降りるぞ』

アディーの声とともに斜めになり、張った風の防壁に支えられながらも視界が開けると、眼下には夜景が広がっていた。

ネオンのような明るさはないが、木の上に建てられた家々や平地の街から温かな光が放たれ、ほんのりと暗闇を照らしていた。

「うわあ。きれいですね！ 夜は暗いだけだと思っていましたけど、空から見ると、灯りがあんなにも美しいなんて……」

「本当だな。……なんだかほっとする灯りだな」

夜景といえば、東京のような都会の街を思い浮かべる。その夜景も美しいとは思ったが、俺には寒々しく見えたものだ。

幼い頃に家への帰り道で見た、田んぼや畑道沿いにある民家の灯りは、とても温かく感じたことを思い出す。

『あつ！ 屋敷の庭に灯りで目印がしてあるの！』

「えっ！ あ、本当だ。火を焚いてくれたのか」

スノーに言われて目を凝らしてみると、赤々とした火で描かれた円がぼっかりと浮かんでいた。あそこがキリーエフさんの屋敷に違いない。

「あつ、私にも見えました！」

焚火で描かれた円に目を奪われているうちに、あつという間に近づいて、反動もなくすっとその中心に降り立っていた。

うわっ。さすがアディーだ。スピードを落とすことなく全く揺れずに着地するなんて！

『アディー、ありがとう。さすがだな』

『フン。ほら、さっさと降りろ』

ここでデレないのも相変わらずだけだな。

ティンファに抱かれていたレラルも、イリンと抱き合っているリアンも、スムーズ過ぎる着地に呆氣にとられている。

「ティンファ、着いたよ。降りようか」

「はい！ アデーさん、ありがとうございます！ 全く揺れないので、とても快適でした！」

「アデーおじさん、ありがとうございます！ あ、でも、どうやって降りる？」

「スノーに乗るといいの！」

大きくなっているアデーの背から地面まではそれなりの高さがある。まして今は夜で、焚火に照らされていても、地面は真暗で全く見えないのだ。

「ティンファ、皆、スノーが乗せてくれるってさ」

ティンファを乗せられるほどに大きくなったスノーが、うきうきとしゃがむ。

「ありがとう、スノーちゃん。乗せてもらうわね」

「おねえちゃん、ありがとう！」

「じゃあ、スノーは皆を頼むな。俺は先に降りているよ」

『まかせろの！』

スノーに皆が乗るのを見届けると、一人先に飛び降りた。

下が見えないので、風でゆっくり、ふわっと着地するように調節する。そうして無事に反動なく着地に成功した。

ふう。暗いと怖いな。距離感が掴めなくても、魔法があるからとても助かるけど。

そしてすぐにスノーが何事もなくストンと隣に降り立った。

「おかえり、アリト君、ティンファさん。皆、無事なようで良かったよ」

声に振り向くと、炎に照らされて佇むキーリエフさんと執事のゼラスさんの姿があった。その姿に思わずティンファと顔を合わせ、そして元氣いっばいに答える。

「ただいま戻りました！」

第三話 再び靈山へ

キーリエフさんとゼラスさんに出迎えを受けた俺たちは、そのまま料理長のゲーリックさんが用意してくれた夕食を食べた。

その後、以前も泊まっていた部屋へ案内され、布団を出して倒れるようにスノーに抱きついて寝てしまった。

しばらくは倉持匠さんの遺した庵で寝泊まりしていたとはいえ、やはり緊張もあつて疲

れていたのだろう。次の日に目覚めたのは、いつもの早朝ではなく、陽が昇ってしばらく経った頃だった。

『あ、起きた、アリト』

『おはよう、スノー。これだけゆっくり寝たのは、いつ以来かな』

まだぼうっとする頭を振り、浄化魔法を掛けてさっぱりしてから支度を整えると、スノーを伴って部屋を出て、階下の食堂を目指した。

『おはようございます、アリトさん。ゆっくりお休みいただけましたか』

階段のところまで来ると、ゼラスさんが待っていてくれた。

『おはようございます、ゼラスさん。ありがとうございます。いきなり来たのに、すみません。ゆっくりと寝させてもらいました』

『それは良かったです。朝食はできていますので、食堂でお待ちください。ティンファさんは起きてこられましたら案内いたします』

この気遣いは、さすがだな。昨夜は旅の詳しい話をする前に眠ってしまったから、色々気になるだろうにな。

キリーエフさんには、出迎えてくれた時に新しく仲間になったリアンとイリンの紹介代けて別れたままだ。タクーのことは、白竜だなんて言ったら大事になるので、詳しく話をする時に紹介するつもりである。

食堂へ入ると、メイド長のナンサさんが俺の分の朝食を並べてくれているところだった。

『おはようございます、ナンサさん。ありがとうございます。あとでゲーリックさんのところへ顔を出しますね。お土産の食材がいっぱいあるんです』

『おはようございます、アリトさん。ええ、ゲーリックも楽しみにしていますよ』

一人で朝食を食べ始めると、ティンファとレラルが一緒に入ってきました。

『おはようございます、アリトさん。ゆっくり寝てしまいました』

『おはよう、ティンファ。俺もさっき起きたばかりだよ。あ、この後おばあさんの家に行く前に、露天風呂を貸してもらおうか？ まだ疲れているだろう？ 昨日はお風呂に入れなかつたから、俺も借りたいと思ってるんだ』

俺は今日もこの屋敷に泊めてもらうので夜でもお風呂に入れるが、ティンファはおばあさんの家に滞在する。普通の家庭にお風呂はないので、今のうちに入っておいた方が旅の疲れはとれるだろう。

オースト爺さんの家に戻ったら、早急にお風呂を作ろう。何で俺は浄化の魔法だけで満足していたのかな。

庵で毎日お風呂に入れる生活を送っていたら、もうお風呂なしの生活には戻りたくなくなりました。というか、お風呂を気にするだけの精神的余裕が出てきたってことだろうな。

『いいですか、ゼラスさん』

「どうぞお入りください。今の時間は誰も入りませんので。あとキリーエフ様は、ティンファアさんを送って戻ってくるまで私の方で止めておきますので」

好奇心旺盛なキリーエフさんのことだから、早く話を聞きたいと思っただろうけどな。「それは助かります。キリーエフさんには色々報告しないといけないことがあるので、戻ったら詳しい話をしますね。あ、ドルムダさんはまだ屋敷に滞在していますか？」

昨夜、俺たちが到着した時にはキリーエフさんたちの食事はもう終わっていて、遅い時間だったので確認する余裕もなかったのだ。

「はい、まだ滞在されていますよ。ただ、今は街の工房の方へ泊まりがけで教えに行っているのです。昨夜知らせを送りましたので、今晚か明日には戻ってくると思います」

ああ、作った物を流通させるには、ドルムダさんが製作するだけでは数が足りないから。街の工房で作らせるって言うていた気がする。

「じゃあ、ティンファア、俺はもう食べ終わるから先に露天風呂に入るよ。出たら声を掛けるから」

「はい。朝食をいただいて、準備しておきますね」

ゲリークさんに旅で手に入れたお土産を渡そうかと思っただけど、とりあえずは風呂だな。

朝食を食べ終わると、着替えを持って露天風呂へと向かった。

「おばあさん、ただいま戻りました!!」

「お邪魔します。無事に戻りました!」

露天風呂に入り、しっかりと温まって疲れを癒すと、ティンファアが入っている間にゲリークさんにお土産の食材を渡して一緒に朝食を作った。

俺たちが朝食を食べ終えたばかりだから、軽めのパンケーキだ。トッピングすれば、ガッツリ昼食にもなるし、ジャムを作って挟めばおやつにもなる。後者はティンファアのおばあさん、ファアラさんへのお土産だ。

早めに朝食を食べ終えた後、キリーエフさんに捕まる前にゼラスさんが馬車でファアラさんの家まで送ってくれた。今も下で待っていてくれる。

「まあまあ、おかえりなさい。アリートさんも、元氣そうで良かったわ」

「はい、怪我をすることなく無事に戻ってこられました。ただ、ティンファアには体力的にかなり厳しい旅になってしまいました……。街で何日かゆっくりしてから、俺の暮らしていた場所へ一緒に向かいたいと思っています」

「ふふふ。いいわよ。こうやってティンファアが笑顔で訪ねてくれたもの。街にいる間は、アリートさんもまた顔を見せに来てくれるのでしょうか? さあさあ、ティンファア、入ってゆっくりしてちょうだい」

「ティンファ、買い出しの時はここに寄るよ。アデーに一日一度は顔を出すように頼むから、何かあったらその時に手紙を預けてくれ。では、ファアラさん、また来ます。お邪魔しました」

笑顔で微笑み合う二人に声を掛けてから、バンケーキを渡して引き返した。さて。いい加減キリーエフさんの相手をしてから、手紙の確認かな。

「ゼラスさん、お待たせしました。俺宛ての手紙は屋敷に届いていますか？」

「はい。商人ギルドへ届いたものは、その日の夕方には屋敷にきています」

「では、ギルドへ寄る必要はないですね。屋敷に戻りましょうか」

そのまま屋敷に戻って扉を開けると、キリーエフさんが待ちかまえていた。まあ、予測通りだ。

「さあ、アリート君！ 色々話を聞かせてくれないか！」

「はい。森の中で運良くいくつかの集落を見つけて立ち寄りましたので、その話もしますね」

そのまま接客室へ案内され、キリーエフさんとゼラスさんに旅の間のことを順を追って話していった。マジックバッグを集落へ三つずつ渡したことを告げると。

「それは良かった。マジックバッグはドルムダが頑張^{がんば}って作ってくれているけど、どうやって流通させるか迷^{まよ}っていたのだよ。あればかりは、アリート君に聞いてから他の工房で



作るかどうかを決めたかったんだ」

調理器具などは、ドルムダさんが作り上げたそばから流通させていた。

でもマジックバッグだけは、ここから俺が旅立つ時でもドルムダさんが屋敷に留まってる、としか聞いていなかった。改良版の方は領主の屋敷や知人へ渡すと言ってはいたけど。

なんだかうれしいな。元々俺は表に出たくなくてキリーエフさんに丸投げしたのに。

キリーエフさんの名前で出すのだし、全部任せただけだから、マジックバッグをどう扱われども文句は言えない。

でも、キリーエフさんは俺に気を遣って製作の拡大や流通はストップしてくれていたようだ。逆に言えば、それだけマジックバッグの扱いは難しい、ということだろうな。

マジックバッグは便利過ぎるし、流通に乗せるかをキリーエフさんに任せただ後も、まだ葛藤はあった。でも、集落での暮らしを目の当たりにして、流通させるべきだと今は思うようになってる。

とはいえ、マジックバッグは元々、上級魔物の皮を使い、そこに自分の魔力を通すことで容量を増やして完成させたものだ。この作り方なら、今の俺のカバンのように部屋一つの荷物は楽に入るようになるが、流通させるものと同じ製法では無理だろう。個人の魔力量や魔力操作の技量の違いで、容量にかなりの差が出るのが最初からわかっている分、使用する人を選ぶからだ。

だから流通させるのは、ドルムダさんと一緒に改良した、使用者の能力に性能が左右されないマジックバッグになる。集落へ提供したのもこれだ。

ただそのマジックバッグだと、だいたい三畳程度の容量しかないんだよな。

「マジックバッグの材料は上級魔物の皮ですが、エリダナの街での取り扱いは多いのですか？」

俺やキリーエフさんなら問題なく手に入れることができるけど、この街の周辺に出る魔物や魔獣は、強くても中級だ。旅していた時も、上級魔物が出てきたのはかなり森の奥の集落からだった。

ここから東の森へ行けば、霊山の影響で上級魔物もいるかもしれないけど……。王都も東の森の中だったっけ？

「王都からの荷物でなら、たまに入荷することはあるよ。まあ、街の工房に恒常的に流通させるのは、僕が手を出さなければ無理だろうね」

「ですよ。なら、キリーエフさんが売ってもいい人を選別して、最初はその人たちから流通させるのはどうでしょう。あと俺としては、旅の途中で森の集落の状況を見ましたから、集落へは優先的に流通させてもいいように思いますけど」

大々的に売りに出すとなると、その分の材料調達をキリーエフさん個人で担うのは無理だ。かといって、俺がオースト爺さんの家に戻ってから商人ギルドへ上級魔物や魔獣の皮

立ち読みサンプル はここまで